

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。



『総合社会福祉研究 第54号』

◆特集／社会保障の保険主義化と生活保障の課題

日本政府の特異な「社会保障観」を問いただすとき……石倉康次

社会保障の保険主義化と生活保障について……相澤與一

政治的言説としての「自助・共助・公助」論の本質……浜岡政好

生活保障と介護保険制度の位置……河合克義

障害者総合支援法7条に基づく障害福祉サービスの打ち切り問題に係る考察

……山崎光弘

後期高齢者医療制度の現況と課題……伊藤周平

公的年金制度の現状と年金受給者の生活実態……小澤 薫

※どなたでも無料でダウンロード可能です!「福祉のひろばHP」よりアクセスください。

編集・発行／総合社会福祉研究所

〒 543-0055 大阪市天王寺区悲田院町 8-12 国労南近畿会館 3 階

TEL : 06-6779-4894 Mail : mail@sosyaken.jp



地球から日本を見てみよう

～ピースボート乗船レポートを終えて～



「核兵器廃絶」と「SDGs」のマークを掲げて世界じゅうの海、港を回るNGOピースボートは、平和な世界のため民間分野での国際交流を目的としたクルーズ船です。1982年、当時の文部省が、旧日本軍がアジアの国々に対しておこなった行為を「侵略」から「進出」に、教科書を書き換えようとしたとき、当時の大学生たちが「されたほうの人々はどう思っているんだろう？ どのような歴史観で見ているんだろう？ 直接、会いに行ってお話を聞いてみよう」と、船を出したことが始まりでした。コロナ明けの2023年から大きく豪華な船になりましたが、その精神は変わっていません。下はエジプトで現地のメディアと共催でおこなわれたガザ攻撃に抗議する集会とバナーアクション。



ピースボートには世界の寄港先で、現地の施設、NPO団体を訪ねたり、人々と交流したりするプログラムがあります。右頁上・児童養護施設「小さな天使たちの家」(メキシコ2023年11月号掲載)、右頁下・少数民族エンベラの人々を訪ねて(パナマ12月号掲載)、左頁上・自然エネルギー地熱発電(アイスランド2024年1月号掲載)、左下・海を守るビーチクリーン活動(アメリカ2月号掲載)。



集めたゴミ（ペットボトルのフタ）から
アップサイクルでつくったアクセサリ

船内では、いま世界で起きていること、考えるべき課題は何か、誰ひとり取り残さない、人権が犯されない世界のために、平和な未来を実現していくために——紛争、差別や格差、貧困、海洋汚染や生態系、災害、ジェンダー、環境問題などを考える講演やセミナー、ワークショップなどの企画が毎日おこなわれます。



夏祭り、運動会、発表会などのイベント、それぞれの実行委員会や、新聞部、映像部などの部活動、乗船者による「自主企画」も盛んです。「自分で考えて、行動する人が、一人でも増えなければ、よりよい世界は実現しない」からです。2割が日本人以外、2割が30歳以下という船内で、国境を超えた交流や、若い世代との仲間づくり活動も貴重な体験でした。世界は広く、多様性に満ちています。だけど「違いに壁を築く」より、「違いから学ぶ」ことのほうがずっと多いことを実感しました。

上・洋上運動会、下・新聞部の仲間と。

(写真と文：根津眞澄)

●特集● 第28回合宿研究会 in ソウル
低出産・高齢化・貧困——日韓共通の課題を考える(後編)

ホームレスの人間らしい暮らしを実現するために ——ソウル市立永登浦ポヒョン総合支援センター	12
児童福祉施設の先駆け的とりくみから、自立のその先を展望する ——児童養護施設・永楽保隣院	19
参加者の感想～永登浦ポヒョン総合支援センター・永楽保隣院～	26

●サブ特集●

こどもたちと一緒に楽しい保育を！	望月 謙吾	30
利用者とともに成長しつづけられる仕事	種市 朋子	32
人として成長できる福祉の仕事	寺尾 智子	34

●トピックス●

〈緊急レポート〉能登半島地震・被災地から 権利としての社会福祉を担う ——社会福祉法人は何に向き合っているのか	北垣 智基	36
2024報酬改定緊急学習会	浜岡 政好	42
会員訪問——山口県防府市へ	山崎 光弘	48
	中島 素美	52

●連載●

WORK WORK——わくワク——

利用者の創造性を活かして製品づくりを

にここファクトリー 58

JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合(37)

率直に自分の思いを出しあえてる？ 心理的安全性を高めよう① 60

私の履歴書 社会福祉経営全国会議(37)

二足のわらじで18年 中林 博志 62

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎(57) 水野阿修羅 64

相談室の窓から 家族の愛と信頼のもとで 青木 道忠 66

育つ風景 給食室のおとなたちが分かり合える瞬間 清水 玲子 68

映画案内 花束みたいな恋をした 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 72

『10代に届けたい5つの“授業”』

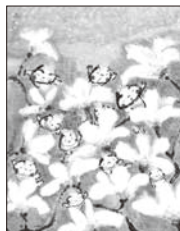
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

似顔絵ブギじゃ？ ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



あなたのまんまがいい

まる
～どんな私も○～

市民グループ「まんま会」代表 貞平 理恵

二〇一一年一月、『1/4の奇跡〜本当のことだから〜』という映画に心を打たれ、「みんなが違っていい。一人ひとりが大切なかけがえのない存在」とたくさんの人に伝えたいと市民グループ「まんま会」をママ友達と立ち上げました。ありの「まんま」を大切に、大切な喜びの食事「まんま」、目に見えないご縁や神仏の「まんま様」、命の源である母の「まんま」を意味に込めました。

育児休業中で、小さな子どもを抱え、上映会の告知に動き出した矢先、東日本大震災が起きました。活動を休止し、被災地支援の物資を準備する活動をひたすら手伝いました。迷ったあげく、「今だからこそ、多くの方に観てほしい」と五月八日の「母の日」に上映会をおこなったところ、予想を超える四〇〇名以上の方々が来られ、たくさん喜びの声をいただくことができました。

学校現場に復帰した後、もつとゆるく人がつなげられたらと思い、副代表のお寺で、月に一回の「一品持ち寄りおしゃべり会」をはじめました。副代表のにぎるおにぎりと参加者の持ち寄りをおかずをおいしくいただきながら、おしゃべりしたり、大笑いしたり、踊ったりとそれぞれが楽しみ、口コミで毎回新しい参加者が増えました。会うたびに、心を許して日々の悩みや苦しみを出せるようになりました。愚痴ではなく弱音を吐いてちよつと力が緩み、またそれぞれの場所でがんばっていきける、そんな心が軽くなる居場所になっていきました。

その人にしかできなかった体験、その人にしか言えない言葉があり、それがまた誰かを救い、誰かの力になることを目の当たりにしてきました。「人は人に救われる」、みんな違うからできることです。



さだひら りえ

山口県防府市の市民グループ「まんま会」代表。小学校教師。山口県般若寺に生まれる。かつて夫の祖父母が営んでいた銭湯「戎湯」を改装し「こころの銭湯まんまある」を開設。幅広い世代の交流イベント開催、子どもたちのまんまスクール開校。LINEグループに129名、Facebook、Instagramでも告知。



まんま会
Instagram

コロナ禍で活動ができなくなったとき、「やっぱり人と人がリアルに出会える場が必要!」と、二〇二二年、夫の祖父母が経営していた銭湯をリノベーションして居場所づくりをスタート! 仲間や保護者や教え子とともに、物置になっていた銭湯から荷物を全部運び出しました。大工さんを講師に迎え、男湯と女湯を仕切っている脱衣場の壁をこわしました。広がった空間を「こころの銭湯まんまある」と名づけ、念願だった子どもたち対象の「まんまスクール」を月一回、さらに不定期で「子どもも大人も心が軽くなる」イベントを開催中です。

私は、一四〇〇年の歴史ある山寺に生まれました。「まんま会」を立ち上げる前年、八九代目住職だった父が亡くなりました。寺を復興しようと父が大切にしてきた「火渡り柴灯護摩」の日を選ぶかのように。父の跡を継いだ九〇代目の弟も、寺の復興に邁進し、その途上で逝去。私は、父と弟の生き様から「道半ばになっても、自分にしかできないこと、やりたいことを精一杯やればいい」というメッセージを受け取りました。

幼いころ、「すべての人はいつか必ず死ぬ」と知って号泣し、「死ぬのなら、何のために生きるのか。自分の存在の意味は?」と問いつづけて生きてきました。たどり着いた答えは、「人は生きていてはならず、たくさんの奇跡の上に生かされている。宇宙で唯一無二のありのままですばらしい存在」ということ。そのことを、子どもたちをはじめ多くの人に伝えていきたい。そして、心が軽くなって楽に生きてほしい。そのために、もつとみんながごちゃまぜに一緒にいる場が大事だと思っています。これからも、仲間とともに「こころの銭湯まんまある」で、赤ちゃんからお年寄りまでごちゃまぜに一緒にいることで、「あなたのまんまがいい」を伝えていきたいです。

「健康で文化的な生活」を支える福祉労働

二〇二三年に韓国を訪れた日本人客は約二三二万人で、訪韓外国人客の二一・〇%を占め、日本人が一位でした。いっぽう、日本を訪れた韓国人は約六九六万人で、訪日外国人客の二七・八%を占め、こちらも韓国人が一位。円安の影響もあり、日本を訪れた韓国人客は、韓国を訪れた日本人客の三倍です。コロナ禍における渡航制限が解除され、日本と韓国の交流はより大きく広がっています。

今号の第二八回合宿研究会inソウル（後編）では、二日目の永登浦ポヒョン総合支援センター（ホームレス支援施設）の視察と、三日目の永楽保隣院（児童養護施設）の視察の概要を報告します。

ふたつを見学させていただき共通して感じたことは、子どもたちやホームレスの方たちへの支援のなかで、文化活動や体験・経験をとっても大切にされていることです。ポヒョン総合支援センターでは、人文学を学んだり、歴史遺跡地めぐるプログラムがあり、オーケストラ活動にもとりくんでいることにおどろきました。永楽保隣院では、キャンプは年に三回、美術や園芸などの文化プログラムがゆたかです。

施設の実践だけでなく、韓国では、日本の生活保護制度と同様である国民基礎生活保障制度の対象である生活困窮者に対し、「文化ヌリカード」という文化利用券を、二〇〇四年から支給しています。経済的理由等で文化芸術に触れる機会が少ないことが課題だとしてつくられた制度です。韓国文化観光研究院が文化芸術活動や休暇などについておこなった調査によると、二〇一九年では、国民の八一・八%が文化芸

術イベントを楽しんでおり、低所得世帯では五一・七%と、はじめて五〇%を超えたとのこと。文化観光研究院は、ヌリカードなどが拡大されたことが背景にあると分析しています。

(KOREAnet¹ <https://japanese.koreanet/NewsFocus/Society/view?articleId=182170>)

ひるがえって、日本はどうでしょうか。生活保護基準は切り下げられつづけ、文化的な生活どころか、最低限度の生活をどこまで切り下げられるかという議論のなかで、生活保護基準はまさに生存ラインギリギリの状況です。生活保護基準には、日本社会全体の意識、「健康で文化的な最低限度の生活」だと考えるレベルが反映されます。つまり、低所得層に限らず、日本全体において、「文化的な生活」への認識が、韓国にくらべてきわめて遅れているということです。

もう一つ、視察から共通して感じたことは、福祉労働者の処遇や担い手不足の問題です。ボヒョン総合支援センターの職員さんは、「この仕事はとてやりがいがあるけれど、職員の思いに拠っていると量が大きく、処遇もいいとは言えない。そのため、スタッフがほしくても集まらなくて、一人ひとりの仕事量がとても多い。このままでは、福祉の仕事をめざす若い人がいなくなってしまう」と危機感を話してくださいました。前号で紹介したシンポジウムでも、日本の「やりがい搾取」と同じである「情熱pay」という言葉があることを紹介されました。

福祉現場の担い手不足、処遇の問題は、日本もまったく同じ問題を抱えています。背景には、程度の差はあれ、社会保障や社会福祉への支出を経済成長の足かせとみたり、福祉労働の専門性が軽視されたり、共通する社会的課題がありそうです。そこをどう突破できるのか、国を超えて一緒に学び合い、考えていくことは、大きな一歩になります。経済のグローバル化に対し、現場の実践や運動もグローバルに対抗していくことが求められているのではないのでしょうか。

(編集主任・申)